

## 共通経験の場としての 学校教育

学校教育という経験は同世代間で、例えば給食などの話で「あったあった」という盛り上がりを提供してくれる。ちなみに、筆者は、たまにコッペパンに代わり米飯が出るようになった1970年代に小中学校時代を過ごした。

この世代は、出身が異なってもソフト麺や鯨の竜田揚げで話が合うはずである。片や、今の学生や自分の子どもと給食の話をするに献立が随分と変わっており、時代の流れや自分の年齢を痛感せざるを得ない。

また彼がどんな句を詠んだのかは思い出せないけど、正岡子規と聞けばあの横顔がすぐに浮かぶという人も多いのではないだろうか。教科書では作家や政治家の肖像は同じものが使われ続けるためか、これは今の学生諸氏とも話が合う。学校教育は知識伝承の制度であると同時に、経験を共有する場でもあるのだ。

受験体験もまた同世代間では格好の話題となる。筆者が大学を受験したのは、共通一次試験導入4年目である。5教科7科目1000点満点のマークシートの共通試験と個別学力検査の総計で合否が判定された。国立大学の入試が一発勝負になったため私立との併願が進んだのもこの時期である。なので、理科と社会(当時)の2科目はそれぞれ何を選択したかとか、どんな大学を併願して結果はどうであったかとか、仲間内では今でも話題になるし、話しているうちに受験勉強に打ち込んだ(はずの)あの日々を懐かしく思い出したりする。

## 自分の経験を 「定規」にする危うさ

しかしその経験は異世代と対話する際、また違った意味を持つ。気を付けないと、文系理系にかかわらず、全科

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター准教授

④ コッペパンとマークシートの同時代史

## 曇りのち晴れの アドミッションな日々



目に満遍なく目を配らざるを得なかったという自分の経験を、あるべき受験の形として今の高校生や大学生に押しつけかねない。一方、共通一次初期は個別試験の多様化が進み、小論文や実技、面接といった選抜方法が導入された時期でもある。筆者も面接や小論文で受験した経験があるので、この手の非教科型試験に対しては鷹揚に考えるほうだと思う。

このように、われわれは自分の受験経験をいわば「定規」として用いる傾向に注意しなければならない。それが給食の話のように、酒の席や雑談の域であればいいのだが、受験の現在を考える際、かつての受験経験に依存しきってしまうと、高校生に自分の追体験を強いることにつながりかねない。

逆に自分が経験していない入試や選

抜方法を受け入れることに困難を感じる向きもあるかもしれない。以前、推薦合格者が出た高校に挨拶に行った際、進路指導の先生から「私は推薦入試は大嫌いです」と面と向かって言われたことがあった。一方で「自分が推薦入試を受けた経験がないのでどう指導していいものか…」と語ってくれる先生がいることも考えると、進路指導には自らの受験体験が何らかの形で反映されると考えざるを得ない。

選抜方法や受験科目を決める大学側にしても事情は変わらないだろう。自分はそうやって受験し、そうして合格したという経験は、いわゆる「思い出補正」も加わり、選抜方法の検討に少なからぬ影響を及ぼしているのではないかと思う。その意味で、推薦入試でセンター試験を資格試験的に使う大学がいったい何点以上を要求してくるのかは、それを検討した大学関係者の受験経験が大いに反映されている可能性があり、実に興味深いものがある。

## 多様化第一世代である 50sのミッションとは

もっとも、先に述べたように個別試験は小論文と面接のみという大学が現れるなど、共通一次試験の導入は、大学入試を一定程度多様化した。そのような共通一次の初期世代は今50歳を過ぎ、高校や大学では中核を担う年代だ。状況は決して同じではないが、多様な入試を経験したという受験履歴は、今、進路指導の先頭に立ったり、入試制度の改革の中心として活躍したりする際に大きな意味を持つと思う。

「大学には推薦入試で入学したので高校できちんと受験指導ができるのかとても不安です」という相談を教職課程の学生から受けたことがある。誰が不安にさせたのかも気になるが、その受験経験“も”また生かせるような進路指導や大学入試を考えていくことが、われわれ50代の役割かもしれない。